

# 地域活性化という「遊び」

17

京都市 福知山市 「みわ・ダツシュ村」から

山本晋也

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダツシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダツシュ村副村長。

「ト イレに行きたいんやけどついでに来てくれへん？」

今年一年生になった長女  
ついでこの間まで六年生の三男もちよ  
つと怖がるようなトイレに  
一人で行ってたのに突然行けなくな  
りました。

田舎にある古い家は  
トイレが離れにあってたりするので



隣のおじいちゃんの家。  
構造材にはおじいちゃんが子供の頃父親と一緒に  
裏山から切り出した木が使われているそうです。

夜ともなると暗闇の中を歩かないと  
行けないのです。

トイレの場所も照明も  
全く変わっていないのに  
彼女の中で

何かが変わったんでしょね。

考える力とかイメージする力がつい  
たという見方をすれば

成長したということの証なのですが  
日々仕事に忙しい親や

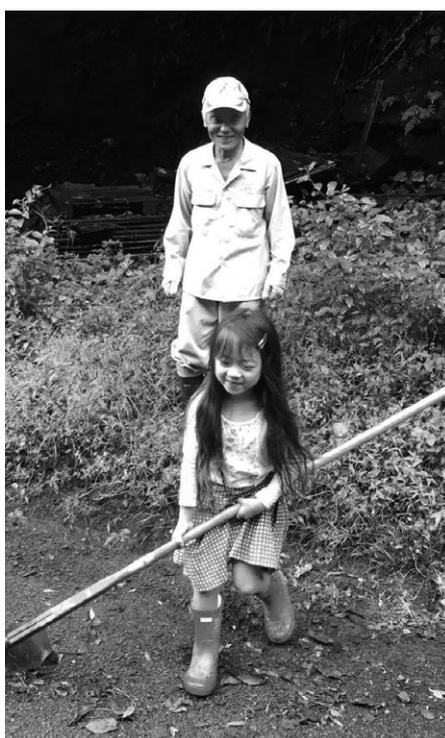
成長しているのとやりたいこと  
ある男兄弟たちからすると  
面倒な事態。

「この間まで自分で行ってたやろ、  
一人で行って来いよ」

とついつい叱ってしまいます。  
こんな時家族の中に

じいちゃんかばあちゃんがいたら

お年寄りの何気ない口癖に隠された  
深〜い意味と知恵と説得力



この人が隣のおじいちゃん。  
子供がなにしようがにこにこ  
見守ってくれています。  
86歳というに現役。  
田んぼも畑もやりながら山には  
新たに栗の木の苗まで植えています。

いいのになといつも思います。

「まー良いわいな」  
「しゃーないわな」

というのが  
隣(と言っても100m位離れてい  
ますが……)のおじいちゃんの口癖。

ですがこのおじいちゃん  
只者ではありません。

86歳ということもあって  
草刈りなど非常にマイペース。

一つ一つの事は  
非常に遅いのですが

最後まで終わってみると  
なんとも美しい。

まだまだ若いとスピード重視で力任  
せにやっちゃう僕らの仕事とは



道を歩いていると「おーいこっちゃんー来い」と呼んでくれます。



長女の元気が生まれた時は皆さん本当に喜んでくれました。移住者の山本家としては唯一の地元民誕生です。



年2回の溝そうじ。何百メートルもありますが、子供も年寄りもみんなで力合わせてやっちゃいます。

なんだか質が違うのです。田畑だけではなく家の周りも山も植木屋さんがやっているんじゃないかと思うくらいにいつも綺麗。

「まー良いわいな」

「しゃーないわな」

僕らが使うといい加減で無責任な言葉に聞こえてしまいますが

このおじいちゃんは同じ事を言いながらも

カタツムリのように

コツコツコツコツと

日々確実に仕事を進めていきます。

お決まりの台詞を聞くたびにまーのんきなおじいちゃんやなーと微笑ましく思っていたのですがある時、このおじいちゃんの時

「まー良いわいな」

「しゃーないわな」

というそのお決まりの台詞の前後に「今すぐ全部はできないけど」

「最後にはきっちりやるよ」というフレーズが隠されていることに気がつきました。

隠されているというより

そういう心構えがしつかりと腹の底にあるって感じでしょうか。

今から比べると本当に何も無い時代を生き抜いてきたからこそ

使える言葉なんだと思います。

そんな人達の日々淡々と生きる姿を目の前で見せてもらえるということ

は僕ら家族にとって

とってもとってもとーとーとーってもありがたい事です。

親の世代が到底与える事ができない大きな何かを

知らないうちに子供達に与えていただいています。

「だんないでー」（大丈夫だよ）  
「だ」という言葉も

こちらへ移住してきてからよく聞き言葉ですが

これを同世代に言われた場合

「何言ってるの、人の気も知らない

で無責任な」

というふうを感じる人が多いのに集落のお年寄りから言われると何だか本当に大丈夫なような気がしてほっとするのは

僕だけではないはず。何がそうさせるのかというと

やはりその存在感でしょうね。86年も前に生まれた人がまだ目の前で生きて動いているというのは

よくよく考えるとものすごく考えますか??

うちの子供達は

その存在感を毎日肌で感じているので、僕が年寄りを大切に教える以前に

「年寄りってすごいな」と思っています。

逆に子供達の存在感というのがありますね。

生まれてすぐの赤ん坊が放つあの存在感。

移住以来子供の声があるだけで元気になるよと集落のお年寄り。

特別なものは何もありませんが年寄りも子供も

存在すること自体が素晴らしいと感じられる限界集落の

暮らしの中には

現代社会の抱える様々な問題を根底から考えなおすためのヒントがあるような気がしてなりません。